様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００５２３

研究課題名（和文）沖縄文学と在日朝鮮人文学の「1965年」

研究課題名（英文）Okinawan Literature and Korean Literature in Japan "1965

研究代表者
呉　世宗（OH, Sejong）

琉球大学・人文社会学部・教授

研究者番号：９０５８８２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「1965年」「離脱と帰属」「東アジア」という観点から、在日朝鮮人文学と沖縄文学の比較検討を目的とした。両文学に共通することとして、第一に、日韓条約の締結によって東アジアに新たな政治的文化的空間が生まれ、第二に、この条約の締結によって日韓米の新たな軍事的体制が編成され、それへの抵抗が在日朝鮮人および1960年からはじまる沖縄で生まれていたことがある。そのようななか沖縄文学は米国による実質的な信託統治を対象化し「日本」を問い、在日朝鮮人文学は日本へ定住化と南北朝鮮からの離脱をテーマとしていた。そして両文学とも「離脱と帰属」をテーマとしつつ、結果的に「東アジア」という空間を構想していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
在日朝鮮人文学および沖縄文学を「1965年」「東アジア」「離脱と帰属」という観点から論じる本研究は、両文学を共通の舞台に置くことで、その重なりと差異を可視化させる。それによりこれまで個別に論じられてきた沖縄文学と在日朝鮮人文学を接続し、東アジアを構想しようとしてきたかを呈示したところに学術的意義と独創性がある。加えて従来の60年代論は1968年を中心的な出来事として論じてきたが、沖縄と在日朝鮮人たちの文学的抵抗を生み出した1965年に注目することは、この地域に生じた独自の政治的文化的空間の意味を明らかにし、60年代論を東アジアという観点から刷新する可能性を拓く。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to compare and contrast Zainichi Korean literature and Okinawan literature from the perspectives of "1965," "secession and belonging," and " East Asia. The political circumstances common to Zainichi Korean literature and Okinawan literature were, first, that a new political and cultural space was created in East Asia with the conclusion of the Japan-Korea Treaty, second, that a new military regime between Japan, Korea, and the U.S. was organized with the conclusion of the treaty, and third, that resistance to this regime was emerging among Zainichi Koreans and in Okinawa. Against this backdrop, Okinawan literature questioned "Japan" while focusing on the "trusteeship" by the U.S., while Zainichi Korean literature focused on the theme of resettlement in Japan and secession from North and South Korea. While both literatures focused on the theme of "secession and belonging," they ultimately conceived of the space of "East Asia.

研究分野：在日朝鮮人文学、沖縄文学

キーワード：1965年　在日朝鮮人文学　沖縄文学　東アジア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1960 年代を政治的、思想哲学的、文化的に論じるとき、当然「20 世紀で唯一の世界革命」（ウォーラスティン）と称された 1968 年が注目される。ヨーロッパや米国、ラテンアメリカなどで学生を中心にした異議申し立てが同時的に起き、フランスを中心にポスト構造主義と呼ばれる思潮が登場し、アングラと呼ばれる芸術的な動向が現れたためである。

日本においても 1968 年とは、ベトナム戦争反対運動や日本大や東京大での大学闘争、あるいは大阪万博に現れるような歴史的な出来事、そして「沖縄闘争」の時であった。関連する研究書やエッセーも多く存在する。だが傾向としては日本社会を中心とした観点となっており、自らの内にいる他者（在日朝鮮人）や、「沖縄闘争」が叫ばれていたとはいえ、それもまた日本から見たものであり、沖縄現地を正面に見据えての議論とは言いがたいものであった（小熊英二『1968』、三橋俊明『路上の全共闘 1968』）。加えて言えば在日中国人たちによる新左翼のナショナリズム批判、いわゆる「華青闘告発」（1970）や、寸又峡立て籠もり事件である金嬉老事件（1968）を受けて学生運動が囚われていた植民地主義が反省され、裁判闘争に知識人たちが立ち上がったものの、それもまた日本社会、日本人の主体性の問題やその変革に焦点を合わせた文脈においてである（絓秀実『革命的な、あまりに革命的な』、森宜雄『台湾／日本　連鎖するコロニアリズム』、鈴木道彦『越境の時』）。1968 年という事件が世界的であるにも関わらず、そこには日本・日本人に限定された議論になっているという捻れがあったのである。その結果、日本での 60 年代の議論において深められずにきたのが、沖縄と在日朝鮮人の 60 年代であった。

在日朝鮮人社会と沖縄に関していえば、1968 年よりも 1965 年が重要である。（１）日本の植民地責任や両国間の歴史認識のズレを棚上げにしたまま日韓の国交が正常化し、（２）この日韓条約締結を契機として日米韓の新たな軍事体制が東アジアに生まれ、沖縄がベトナム戦争のための基地、即ち加害の島となっていった。またこの時期は、（３）在日朝鮮人社会では日韓条約反対運動と日本への定住化が同時並行的に進行し、（４）沖縄では日本への復帰を要求する復帰運動が、1965 年の「北爆」開始を契機に「第三世界」との連帯を模索し、反戦・反基地・反米・反日韓条約を運動方針に掲げることとなった。つまり一方で、米国の東アジア戦略に基づく日韓条約の締結と沖縄の軍事基地化に在日朝鮮人社会も沖縄も共に巻き込まれ、他方で、米国主導の国際的動向に沖縄の人々と在日朝鮮人が抵抗するという構図が「東アジア」を舞台にして「1965 年」に形成されるのである。それは 1968 年に先んじて起きた、ドラスティックな越境的な政治的変動であった。その中で本研究が着目したのは、この時期の沖縄文学と在日朝鮮人文学であった。というのも、沖縄文学は抑圧的な米軍統治から離脱し、日本への復帰を志向するテーマがこの時期現れ、他方で在日朝鮮人文学は、日本への定住化を受け入れながらも、残存する植民地主義ゆえに日本から離脱する志向性を持ったからである。のみならず南北対立を深める朝鮮半島への帰属も拒む傾向も在日朝鮮人文学は帯びた。それは結果的に地域を超え「東アジア」で合流しうる可能性を持つ傾向であった。つまり、離脱と帰属の内実は異なるとはいえ、沖縄文学と在日朝鮮人文学は、ともに「1965 年」という文脈の中で米日韓を総体的かつ批判的に捉え、「東アジア」を問うていたと見ることができるのである。同時にこの時期の在日朝鮮人文学と沖縄文学は、「自立」「民族的主体の確立」「伝統と創造」「第三世界との連帯」といったテーマや概念を図らずも共有しており、単に批判的に問うだけでなく、自分達の「東アジア」を構想していたと考えることができる。これらのことから（１）1965 年、在日朝鮮人社会と沖縄が、東アジアという場の中でどのように位置づけられ、（２）その際両者の文学が「離脱と帰属」を志向しつついかに東アジアという空間を批判的に問い、また構想していたのかが本研究の背景であり問いであった。

２．研究の目的

本研究は、「1965 年」「東アジア」「離脱と帰属」という観点から、在日朝鮮人社会と沖縄が 1965 年という文脈の中にどのように置かれ、そしてその中で在日朝鮮人文学と沖縄文学がいかに東アジアを捉え返し、構想したのかを比較文学的に検討することを目的とした。

これまで在日朝鮮人研究において 1960 年代ないし 1965 年は、主として日韓交渉、日韓条約が国際政治学や歴史学的観点から研究されてきた（そのすぐれた成果として太田修『日韓交渉』、吉澤文寿『戦後日韓関係』）。また沖縄においても 1960 年代は、米軍統治の有り様を政治史、歴史学的に検討するものが主であった（新崎盛暉『沖縄現代史』、大田昌秀『沖縄の帝王　高等弁務官』）。また民衆の観点に基づいた場合でも、両者は同じく個別に検討されてきた（森宜雄『沖縄戦後民衆史』、小沢有作編『近代民衆の記録 10』）。また沖縄と在日朝鮮人をともに視野に入れた研究もなくはないが、1940 年代の議論に留まっている（『帝国日本の再編と二つの「在日」』）。

本研究が主対象とした文学領域を見るならば、在日朝鮮人文学も沖縄文学も日本そして韓国の両方において研究が蓄積されている。沖縄文学に関しては岡本恵徳、大城貞俊、仲程昌徳らの文学史研究があり、また目取真俊をはじめとする代表的作家の特集や翻訳を行う雑誌が現れて

いる（『越境広場』、『地球的世界文学』等）。チョ・ジョンミン『沖縄を読む』といった浩瀚な研究書も韓国で公刊されている。在日朝鮮人文学に関しては磯谷治良や林浩二の文学史的研究や、朝鮮人組織の文学、女性の文学、亡命文学といった多様な論点を提出した宋恵媛『在日朝鮮人文学のために』等の貴重な成果がある。本研究代表者（呉世宗）も日本語詩人・金時鐘についての研究書を出版し（『リズムと抒情の詩学』）、また許南麒や姜舜といった文学者について論じてきた。しかしこれらの研究は個別の作家・作品論、あるいは文学史的研究となっており、両文学が植民地主義や東アジアという枠で括られるにも関わらず、東アジアという観点から両者を比較し横断的に論じるには至っていなかった。

在日朝鮮人文学および沖縄文学を「1965 年」「東アジア」「離脱と帰属」という観点から横断的に論じる本研究の視点は、両文学の作家と作品を共通の舞台に置くことで、その重なりと差異を可視化させていくものである。それによりこれまで個別に論じられてきた沖縄文学と在日朝鮮人文学を接続させ、それらが韓米日の国際政治的な動向から強く影響を被りつつも、いかに東アジアを構想しようとしてきたのかを呈示しようとした。そこに本研究の学術的独自性もあった。また 60 年代論は基本的に 1968 年を中心的な出来事として取り上げてきたが、しかし 68 年の強調は、1965 年を前史的な扱いとすることでその重要さを不可視化する危うさがあった。だが、日韓条約締結による東アジア状況の書き換えとベトナム戦争激化に伴う沖縄の軍事基地化、他方で沖縄や在日朝鮮人たちの運動や文学的抵抗の高揚を生み出した 1965 年は、独自の政治的文化的空間を生み出した時期であり、それを明らかにすることは、60 年代論を東アジアという観点から刷新する可能性を拓くものであった。この点に本研究の創造性もある。

３．研究の方法

（１）「1965 年」の「東アジア」と沖縄と在日朝鮮人社会の関係の解明

在日朝鮮人社会と沖縄が共通して置かれていた「1965 年」「東アジア」との関係様相について明らかにする。そのために米国の東アジア戦略と韓国そして日本の国際的な連携の様相、そしてそれに対する沖縄の人々と在日朝鮮人たちの抵抗の様相に着目し、それらのせめぎ合いが生み出す東アジアの姿を描き出していく。それに際し、日韓条約や米国の東アジア戦略に関する文献を収集し検討を行った。また琉球列島米民政府（USCAR）関連の史料、韓国・沖縄・日本の新聞資料なども利用して分析を進めた。また人々の抵抗については、二次資料を含めた基礎資料の調査収集を行いながら沖縄に関しては『沖縄県祖国復帰運動史』等を、在日朝鮮人に関しては『在日朝鮮人県警資料集成』等を利用し分析した。

（２）「1965 年」「東アジア」における沖縄文学と在日朝鮮人文学の「離脱と帰属」様相の解明

沖縄文学においても、在日朝鮮人文学においても 1965 年を契機として「離脱と帰属」がキータームとなってくる。しかしながら沖縄文学では米軍統治からの離脱、在日朝鮮人文学では日本、そして南北朝鮮からの離脱というように両者においてはその意味が異なる。上記１．を踏まえ、両文学の作品分析を通じて「離脱と帰属」の差異を明らかにした。それとともに関連する「民族的主体の確立」「伝統と創造」「第三世界との連帯」等のテーマの分析を通じて、両文学が「東アジア」をどのように捉え、また新たに構想していたのかを総合的に明らかにした。そのために沖縄文学に関しては、大城立裕、霜多正次、崎山多美、目取真俊や『新沖縄文学』『琉大文学』等に掲載された作品群を収集し分析を行った。在日朝鮮人文学に関しては、李殷直、金時鐘、金石範といった文学者や雑誌『朝陽』『白葉』等の作品を収集し分析をした。

４．研究成果

論文「詩を生きる「社会主義者（サフェジュイジャ）」――金時鐘『地平線』を読む」では、在日朝鮮人の日本語詩人 ・ 金時鐘の第一詩集『地平線』を論じた。『地平線』は時代状況に深く関わりながら、金時鐘の詩を限界付けるよりも，むしろその文学の可能性を東アジアと関係づけて拓くものとしてあることを確認した。その可能性には，金時鐘が植民地に身に着けざるをえなかった日本語に日本語でもって対峙しようとしていることなど、この詩人にとって最大の特徴も含まれていたことを明らかにした。

関連して論文「風土の中の風土、そして動物たち――金時鐘『日本風土記』」では、金時鐘の第二詩集である『日本風土記』を、日本の「風土」を多元化する詩集としてあることを明らかにした。それは日本の中の在日朝鮮人の風景、すなわち日本の中の東アジアとしてあり、それが「風土」を多様なものにするものだと論じた。加えて詩集には、多様な動物たちが現れており、それらの存在もまた日本の「風景」を複雑にすると指摘した。

論文「未完の沖縄構想と在日朝鮮人文学者の思想との連結のために」では、今現在においても課題として残っている、60 年代に大きく展開した復帰運動について論じた。復帰運動の総括されていない点は、単に運動の進め方の問題といった戦術的な側面についてだけでなく、復帰しようとする「沖縄」とは、復帰する先の「日本」とは、ひいては「国家」とは何かといった巨大な思想的問いについてである。復帰運動それ自体から、また当時生まれた思想から、あるいは復帰後に語られた言葉や文学作品から、復帰運動そのものを論じ直し、沖

縄現代史の中にあらためて位置づけるとともに、東アジアの歴史の中に置いてみること。復帰運動は 50 年代中盤ごろから行われているが、沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）が組織され、ベトナム戦争の激化を前後してラディカルに「基地撤去」を訴えながら「復帰」を目指した、60 年から 72 年までのおよそ 10 年強の運動の歴史を、多様な観点から丁寧に整理し、分析した。

論文「済州と沖縄の歴史から辺野古および江汀へ」では、1948 年の「四・三事件」を歴史的にも国政政治的にも広い観点から見ていく必要がある。とりわけ沖縄、韓国、済州島が、米軍の東アジア戦略のもと土地の収奪と基地の拡張が起こり（韓国・平澤）、米軍新基地の建設が今まさに強行され（沖縄・辺野古）、米軍と緊密な同盟関係にある韓国軍の基地が新たに建設される（韓国済州島・江汀）といった状況が生まれているときは、なおさらである。つまり戦時から戦後、図らずも重なり合いながら、連動するような関係に済州と沖縄はある。この 2 つの地域の歴史的関係を見ることで、〈四・三〉を東アジアの広い歴史につなぐ視点を提供した。

論文「傷を翻訳する」では、ある地域――沖縄、そして済州島の社会的、歴史的な――「傷」を文学表現を通して解釈＝翻訳することの意義について論じた。社会的歴史的な「傷」を「翻訳」することの困難や不可能性は、しかし歴史的な出来事と出来事を繋ぐ可能性にもひらかれている。私たちは「傷」をどのように「翻訳」しうるのか、その過程で何が失われるのか、なぜ失われたのか、図らずも翻訳されなかった「傷」に私たちはどう立ち戻ればいいのか。あるいは「翻訳」は何を新たに生みだすのか、「傷」を複数で「翻訳」することはいかに可能で、「連帯としての翻訳」の条件はなにかなどについて論じた。

論文「金石範「観徳亭」論――「でんぼう爺い」と状況」では、金石範の作品「観徳亭」を取り上げ、登場人物の一人「でんぼう爺い」の行動がいかにサルトルが言うところの「状況」を露呈させていくのかを論じた。その際、彼の行動を導くものが、この作品の主要な「登場人物」としての「首」である。切断された首はパルチザンのそれであるが、この老人がその首に関わることで諸状況が可視化され、また諸状況を貫く人間／動物という枠組みの発見、そして大きな政治を露わになっていくのである。そこに私たちは、金石範が創出した文学世界およびその可能性を見ることを明らかにした。

論文「沖縄で政治化するウィルスと繋がるディスタンス：開かれた現場、開かれた歴史に向けて」では、新型コロナウイルスが蔓延するなか、沖縄と韓国との間であった文学者どうしの交流を論じた。そこで他者の生や記憶にはじめから連結していて、転写しあえる関係を生きているということ、それこそが沖縄の文学者が提示し続けてきた可能性だと指摘した。そしてこの連結や相互の転写に気づくことこそが、現在のウイルスによってもたらされている政治状況を乗り越えていく可能性でもあると述べた。その上で新型コロナウイルスによって移動が制限されるなか、私たちは個の内に降り立つ「移動」までも「自粛」してはならず、垂直に降り立ち、自分の内に秘められた他者に触れ「私たち」として受け入れていくことの重要性を述べた。

論文「はざまからまなざす――金石範「鴉の死」における主体・状況・言語そして動物」では、金石範の代表作「鴉の死」を論じた。同作品には、多くの動物が現れる。それは鴉、犬、猫といった身近な動物であったり、済州島や「陸地」の食文化の描写を通じて間接的に示される豚や魚であったである。さらには、人ではないという意味において、「幽霊」や「犬人間」といった人間と動物のはざまにある形象も登場する。「鴉の死」においても、例えば警察がパルチザンを「猿」と表現したり、「処分」といった言葉で直接的間接的に動物が示されるが、その多くは人間の比喩となっている。「猿」にせよ「処分」にせよ、野犬を殺傷処分するように動物化された人間が殺されていくことを伝えるために用いられるからである。植民地主義的な位階秩序の中に動物がいるということである。しかし「鴉の死」に現れる「鴉」は、そのような役割を含みつつ、それとは別に人間と動物の境界を攪乱し、作品内での「状況」と、それを構築する「主体」を問い直す動物となっている。その「鴉」に着目して読解を試みることで、金石範作品を動物という観点から、そして東アジアでの出来事の連結という視点が現れてくると論じた。

論文「沖縄戦時の朝鮮人の歴史を掘り起こす」では、沖縄戦に沖縄で連行され、戦死した朝鮮人についての調査について論じた。沖縄戦は 1945 年の事件であるが、しかし戦争でなくなった住民からの証言が集められるのは一九六〇年代中盤以降である。その際、沖縄の朝鮮人についての証言もはからずも残されることとなった。現在においても、ゆっくりではあるが着実に民間の調査が進められ研究が蓄積されている。しかし、朝鮮人の遺骨について注目され始めたのは近年のことであり、それは DNA 鑑定や同位体検査といった技術が沖縄でも適用されることによってである。それら科学技術を用いて、沖縄戦のさい沖縄各地での具体的な状況はどうだったのかなどを明らかにする作業が進められている。そしてその作業が韓国や台湾からも協力を得て進められていることの意味について論じた。

論文「帝国を引き継ぐ文学形式――1992 年以降の日本現代文学における北朝鮮表象、村上龍『半島を出よ』を中心に」では、北朝鮮を登場させる作品の一つ、2005 年に発表された村上龍『半島を出よ』(幻冬舎)を取り上げて論じた。というのもこの作品は、比較的しっかりと文献調査(日本語文献を中心に)をしたうえで北朝鮮とその関連を描く一方で、図らずも過去の帝国主義を呼び出す内容となっているからである。つまり荒唐無稽な他の作品群とは一線を画しつつも、だからこそ深刻な問題を露呈させている作品となっていることを指摘した。『半島を出よ』の読みを通じて、この作品がどのように北朝鮮を描き出しているのかを確認するとともに、それによって日本現代文学における北朝鮮表象が、結果的に何をもたらしているのかの検討を行っ

た。そして『半島を出よ』が生み出した文学形式とは、植民地の歴史に触れつつも忘却するための、そして他者を描きつつも消し去っていくための文体であり実践であること。また前近代/近代という装置が作品内で作動していることからすれば、北の視点という設定は、北朝鮮の内側から書くことを可能にしつつ、しかしそこから現れでる視線を前近代的なまなざしとして処理可能なものにしている。その意味で他者を消し去っていくための文体とは、厄介な者を飼いならす文体だということであり、それは図らずも旧帝国との再接続となっていると指摘した。

論文「東アジアの米軍基地のなかで重なり合う暴力、浮かび上がる歴史」では、現在の韓日間で、それほど知られていないものの一つとして互いの米軍基地問題について論じた。韓国・ピョンテクでの米軍基地再編に至る歴史的経緯、沖縄・辺野古での米軍新基地建設に至る過程を比較的に論じた。そして国境をまたぐ米国の軍事戦略と基地の存在によって、同じような被害や暴力を時間差をともなって被る自体が起きていることを指摘した。そのため韓国と日本・沖縄の間では、一方の側で先行的に何らかの事件が起きたかと思えば（例えば一九九二年の尹今伊殺害事件）、もう一方の側で遅れて同じようなことが起こり（例えば二〇一六年のうるま市女性殺害事件）、その逆もありうるという折り重なりあう関係にあった。それは起きた事件が即座に共通する歴史と化すという構造である。そのため今現在起きている問題の詳細や行方を知りたければ、相手方の基地やその被害の歴史を参照することが基礎的作業となる。辺野古基地に関して言えば、平澤での状況が参照先になるし、また済州島・江汀（カンジョン）でほぼ完成してしまった韓国海軍基地を見れば、新基地建設の行方や韓国軍と米軍の新たな協働的な体制が見えるということになるなどを述べた。

論文「身体の音から他者の音へ――崎山多美作品のオノマトペについて」では、崎山多美作品に現れる「オノマトペ」を取り上げ論じた。それは身体と言葉のその結びつきを垣間見せてくれる言語表現であり、重なりつつ異なる歴史的出来事と作品の関係、すなわち現実と小説内世界をオノマトペが繋いでいると考えることができるからである。崎山作品で用いられるオノマトペの特徴は、一般的に使用される擬態語、擬音語、擬声語とは異なり、新たに音を創出しているところにある。しかも単に奇怪な音が創出されているというわけではなく、騒々しいまでの音を身体を通じて撒き散らすことで、忘却されつつある出来事や記憶されるべきことを聞き取れるように構えさせようとするところに狙いの一つがある。その意味で崎山多美が創出するオノマトペは、他者を受信するためのアンテナのようでもある。そして感受されようとする他者とは、不可視化された歴史的出来事はもちろんのこと幽霊的な存在までも含まれるが、それらは身体と音が交差するところで現れてくることを指摘した。

論文「「オール沖縄」という主体とその危機」では、基地問題を大きく争点化する「オール沖縄」の誕生が、直近で、一九九五年に起きた「沖縄米兵少女暴行事件」からであることを指摘した。この事件は、あまりの凄惨さゆえに島の人々にとってトラウマ記憶ようになっており、米軍が問題を起こすたびにその記憶は蘇ることになっている。そのように痛ましい事件をもたらしてしまう基地に対し、保革を超えて連合し、抵抗、解決しようとするところから「オール沖縄」は生まれたことを明らかにした。他方で、翁長知事を支え、また彼に支えられたオール沖縄が一丸となって基地反対を打ち出すとするなら、そしてアジアの中で真なる沖縄の平和と豊かさを実現しようとするならば、「敵」をまなざすのとは異なるアジアへの視点が求められることも指摘した。そのような視点が欠落すると、基地問題は国を守る「気構え」といったナショナリスティックな議論に流れ、沖縄の歴史の語りから皮肉にも歴史の忘却をもたらす恐れがあるからだと述べた。

論文「海を渡る記憶と遠ざかる身体――金在南「鳳仙花のうた」と崎山多美「アコウクロウ幻視行」」では、元いた場所（木浦）と連れて行かれた場所（沖縄）という関係に置くことのできる二つの作品、金在南「鳳仙花のうた」と、崎山多美「アコウクロウ幻視行」を主に取り上げ論じた。この二つの作品の分析を通じて、「慰安婦」とされた女性（たち）は元いた場所と行った先でどのように描かれているのか、そして彼女（たち）の記憶が、いかに扱われているのかを検討した。国家による暴力を問う文学同士の、そしてそのような文学と私たちの結びつきは、わずかなしるしに気づけるかという出会いの困難さの中で形成されていくのではないかと述べた。そして東アジア文学史というものがあるとすれば、それは一九～二〇世紀の暴力が生んだ遠ざかる記憶、遠ざかる身体を掴もうとする困難な試みによって各文学を出会わせ、それぞれの記憶や身体を結びつけるときに書かれうると論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 呉世宗	４．巻 50
２．論文標題 身体の音から他者の音へ――崎山多美作品のオノマトペについて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 社会文学	６．最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 呉世宗	４．巻 53
２．論文標題 未完の沖縄構想と在日朝鮮人文学者の思想との連結のために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本学	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 呉世宗	４．巻 73
２．論文標題 風土の中の風土、そして動物たち――金時鐘『日本風土記』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 済州作家	６．最初と最後の頁 211-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 呉世宗	４．巻 4(22)
２．論文標題 詩を生きる「社会主義者（サフェジュイジャ）」――金時鐘『地平線』を読む	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育国語	６．最初と最後の頁 4-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉世宗	4．巻 4（20）
2．論文標題 金石範「観徳亭」論――「でんぼう爺い」と状況	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育国語	6．最初と最後の頁 4-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉世宗	4．巻 8
2．論文標題 傷を翻訳する	5．発行年 2020年
3．雑誌名 越境広場	6．最初と最後の頁 183-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉世宗	4．巻 11
2．論文標題 済州と沖縄の歴史から辺野古および江汀へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 平和・コミュニティ研究	6．最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉世宗	4．巻 93
2．論文標題 帝国を引き継ぐ文学形式――1992年以降の日本現代文学における北朝鮮表象、村上龍『半島を出よ』を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 神戸市外国語大学外国学研究	6．最初と最後の頁 167-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉世宗	4．巻 14
2．論文標題 はざまからまなざす――金石範「鴉の死」における主体・状況・言葉そして動物	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『言語社会』	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 呉世宗
2．発表標題 沖縄の復帰運動について――1960年以降を中心に
3．学会等名 植民と冷戦研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 呉世宗
2．発表標題 60年代の沖縄闘争、沖縄構想の行方と可能性
3．学会等名 韓国外国語大学日本研究所　日本のサバルタン研究：東アジアの疎通と相生（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 呉世宗
2．発表標題 済州と沖縄の歴史から辺野古および江汀へ
3．学会等名 済州島四・三抗争72周年追悼研究集会
4．発表年 2020年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 沖縄の朝鮮人の歴史から見えること
３．学会等名 国際日本研究センター比較日本文化部門主催　東アジア連続講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 声を読む文学――歴史の語りと証言
３．学会等名 韓国・慶熙大学グローバル琉球沖縄研究所連続対談（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 金在南「鳳仙花のうた」と崎山多美「アコウクロウ幻視行」
３．学会等名 言文・身体・性――20世紀東アジア文学における越境と葛藤
４．発表年 2021年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 崎山多美作品のオノマトペについて
３．学会等名 「東アジアの文学・言語・文化」国際学術会議（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 『沖縄と朝鮮のはざまで』の紹介
３．学会等名 第5回延世韓国学フォーラム――東アジア革命の歴史と記録の現在（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 海を渡る記憶と遠ざかる身体――金在南「鳳仙花のうた」と崎山多美「アコウクロウ幻視行」 著者名/発表者名　呉世宗
３．学会等名 Literary Debates and the Politics of Memory: Toward an Inter-Asia Perspective（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 呉世宗
２．発表標題 沖縄戦時の朝鮮人から見える加害、被害、そして連帯
３．学会等名 日帝強制動員犠牲者遺骸に関する国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 呉世宗他	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 196
３．書名 思想・文化空間としての日韓関係――東アジアの中で考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関